

北海道雄武高等学校

課程 全日制
学科 普通科
生徒数 123名

1 事業のねらい

本校は限られた地域からの入学者が多く、幼少期から固定化された友人関係や、複雑な人間関係に悩み、自尊感情の高めることができない生徒が多く見られる。中学時代には、級友の言動により傷付き、保健室登校や欠席・早退を繰り返した生徒も多い。現在は、落ち着いて高校生活を送っているが、過去の言動にとらわれて積極的にコミュニケーションをとることができず、互いにストレスを抱える状況がみられる。

そこで、コミュニケーションスキルやセルフ・エスティームを高め、生徒同士の理解深化や良好な人間関係づくりなどに繋げることができる生徒の育成を目指す。

2 取組の経過

5月	構成的グループ・エンカウンターの実施	2月	第2回学級環境適応調査の実施
6月	ピア・サポート・トレーニングの実施 教職員研修会		(1、2年生) ピア・サポーター研修の実施(希望者)
9月	ピア・サポート・トレーニングの実施		
10月	ピア・サポート・トレーニングの実施 第1回学級環境適応調査の実施(1年生)		
11月	第1回学級環境適応調査の実施(2年生) 小・高交流会の実施(1年生) ピア・サポーター研修の実施(希望者)		



3 主な取組の内容

(1) ピア・サポート・トレーニング(1、2年生) 9月10日(金)実施

ア 概要

中野武房先生の指導のもと、1年生はA・B、男女混合班、2年生は各クラス男女混合班による、うし・うまのアイスブレイクと人間関係ストローク学習(プラスのストローク)を1時間実施した。その後、活動の振り返りを行い、プラスのストローク実践記録の宿題が出された。

イ 生徒の主な感想

- ・普段なかなか言えないことを言ったり、言われたりしたので恥ずかしかった。
- ・今まで話をしたことのない人たちと話をすると楽しいということが分かった。
- ・ほめることが本当に大切なことだと感じた。
- ・相手をほめる、よいところを見つけるということを普段はほとんどしないので、自分もよい気持ちになった。



(2) ピア・サポート・トレーニング(1年生) 10月15日(金)実施

ア 概要

中野武房先生の指導で、同じ線でも見え方が違うことや、指1本を左右の目で見ると見え方が違うことをウォーミングアップで確認した。次に、図形の形を相手に伝える活動を通して、一方的な説明では分かりにくく、互いに確認し合うとわかりやすいことを体験させ、コミュニケーションの大切さを実感した。最後に、「出会った人で話しやすい人、相談しやすい人の特徴」をグループ内で話し合い、全体に発表することで、望ましい人間関係を作るための動機付けを行った。



イ 生徒の主な感想

- ・一方通行の会話よりも双方向の会話が相手に伝わりやすいことが分かった。
- ・人と話すことが苦手だが、予想以上に話すことができた。うれしい気持ちになった。
- ・図形の形を相手にうまく伝えられたり、うまく書けたりしたときはうれしかった。
- ・笑顔がいい人、嫌な顔をしないで話を聴いてくれる人は相談しやすいと思う。私も相談しやすい人になりたい。
- ・相手の話を聞かずに一方的に話すと、相手のことが理解できないと分かった。

4 成果と課題

○ 成果

- (1) 他者とのコミュニケーションをとることが苦手な生徒も、ピア・サポート・トレーニングには意欲的に参加し、生徒間の望ましいコミュニケーション活動が見られた。また、トレーニングを通して自己開示することの大切さを学び、校内において生徒同士の会話や生徒と先生の会話が増えた。
- (2) 他者とのコミュニケーションが増えたことにより、生徒は自己理解、他者理解の重要性にも気づき、良好な人間関係づくりに一定の成果があった。
- (3) ピア・サポート・トレーニングの成果は、2回実施した学級環境適応調査において、「非侵害的関係」、「友人サポート」、「向社会的スキル」の数値の上昇にも見られた。学級環境適応調査の結果を活用して個人面談や三者面談を行ったことで、生徒が抱えている悩み等を保護者とも共有できた。

○ 課題

- (1) 教員は、ピア・サポート・トレーニングで実践している内容や教育相談の理論や手法を校内研修会等で研修することにより、これまで経験から学んできたことを再確認し、ホームルームや授業などの日頃の教育活動全般において、生徒同士の望ましい人間関係づくりやコミュニケーションスキルの向上につながるよう努める必要がある。
 - (2) 希望者を対象に行っているピア・サポーター研修をより一層充実させ、多くのピア・サポート・リーダーを育成する必要がある。
- #### ○ 次年度に向けて
- (1) 生徒が主体的に充実した高校生活を送り、授業や進路選択、部活動などのあらゆる場面で、生徒相互がサポートしあう環境づくりができるように、次年度は年度当初より計画的かつ組織的にステップアップ・プログラムを教科指導、特別活動と関連付けて体験できるようにする。
 - (2) 学級環境適応調査の活用や教育相談の手法についての校内研修をより一層充実させ、教員一人一人の生徒理解に係るスキルアップを図る。